

若狹路文化叢書 第十五集

影印本

氣比宮社記

(下卷)

第五卷(国史標出部上)

第六卷(国史標出部下)五十七丁

第七卷(社伝旧記部上)七十二丁

第八卷(社伝旧記部中)七十五丁

第九卷(社伝旧記部)九十四丁

発刊にあたって

私共は、『氣比宮社記』を書いた氣比宮大宮司平松周家、氣比宮大宮司大中臣朝臣、平松美作守景吉など大中臣朝臣魚取公の子孫であり、また大中臣朝臣魚取公の子孫として現在に続く直系である当家が東西北川端氏・石塚氏・石倉氏・平松氏の六家の墓をお守りしており、この六家を平松某と言います。また宮司八家とは、この六家に加えて角鹿姓である嶋家（嶋は直である）・菅原家・宮内家を指します。

元龜元年（一五七〇年）四月、織田信長の北伐を拒むために、大宮司氣比德直等一族は越前国主朝倉義景氏のために神兵・社僧を發し天筒山城に立ち籠りましたが、大敗を喫する結果になりました。この時、天筒山で平松美作守影吉の弟中村兵庫（幼名源次郎）が戦死し、その祠は敦賀市高野に祀られています。そしてこの場所は一五七六年頃に生きた平松美作守景吉や平松周家などの平松家テリトリーの場所でありました。（現在はリラポートの温泉のある場所です。米原からくる敦賀インター出口の真下）にあり、平成三十年八月に実際に出向いてきました。そして織田信長による北伐で大敗を喫した後、豊臣秀吉が敦賀の復興を見に来るため、大宮司であった平松美作守景吉の妻朝倉義景の息女（母は細川晴元の娘、晴元には孫にあたる）は大叔母武田信玄の妻、三条の方を筆頭に東本願寺と西本願寺から援助を受け、山車を作り復興している様子を見せました。現在も続く敦賀の山車はここから始まり、当家にも言い伝えがあります。

また若狭路文化研究会会長 金田久璋様から朝倉義景の正室の一人娘の地蔵菩薩が現存するとの情報を得て、平成三十年十月十五日に福井県三方郡美浜町竹波の法栄寺を尋ねました。その地蔵菩薩は菊姫の持仏と判明し、彼女は一五九六年、氣比神宮大宮司大中臣朝臣魚取公平松美作守景吉の妻で、お寺には由緒正しい高貴な人と伝えられており、菩薩についての関係書類の中に僧空海の名が書かれています。このように法栄寺により菊姫を末代まで守ってもらえる心使いに感謝しております。平成三十年十一月十一日（日）にはお忙しい中、若狭路文化研究会会長 金田久璋先生、若狭路文化研究所々々長 多仁照廣先生、敦賀市立博物館学芸員 坂東佳子様他多くの方々に来ていただき、私の代で菊姫七五〇年法要を行うことが出来ました。そのほかにも空海とのつながりは深く、空海は七七四年の七日間のご祈祷の際に氣比神宮を訪れたり、遺言の中に「もし、厳島神社と氣

比神宮に何かあれば、高野山の私財をなげうってでも、社殿の復興に尽くさねばならない」との言葉を残し、それは氣比神宮の境内の、土公の神様の石碑にも彫刻されています。様々な場面で当家の平松周家が歴史と繋がっていたことに大変驚きました。

そしてこの度、先祖を探るきっかけになったのが平成二十年の敦賀市立博物館による『氣比さんと敦賀町衆』氣比神宮文書は語る』の出版、同時に『氣比宮社記』を大変なご尽力でCD化していただきました吉田進一（嘉兵衛）様によりここまでルーツをたどることが出来ました。また、二〇一八年三月影印本『氣比宮社記』（上巻）が若狭路文化研究会（公財）げんでんふれあい福井財団から長い年を経て出版され、下巻は二〇一九年に出版が決まっています。様々な本に携われたこと、多くの方々から携われたことを紙面を持って心より深く感謝いたします。そして私共が先祖のきっかけを知る以前から、昭和十五年に宮地直一先生（当時東京大学教授）著の『氣比宮社記』（全）（管幣大社氣比神宮出版）の前書きで、「上下二千年にわたる一社の輝かしい歴史は、代々の国史に炳乎として不断の光彩を放ち、自らに頼るべきことを知らしめている。就いては国史記載を授けて、之が史料となると共に、一社の誇りともせらるべき旧記・古文書の類に至っては如何。（二部省略）大宮司平松周家大人が旦夕を測り難い老年に察し、畢生の努力を捧げて編纂したもので權威ある一社の歴史として珍重すべきで価値あるもので蔵する」と記載されています。このように神代から平松周家が生きた一七六〇年まで歴史が書かれた書物は、当時は命がけの出版であったと感じました。

本格的には先祖の勉強を始めて十年程度ですが、何かにつけ協力を惜しまずサポートしていただいている、主人をはじめ家族や従業員にも感謝しております。まだまだ『古事記』や『日本書紀』に書かれていない言い伝えがあり、それ故に平松周家が『社記』に書けなかったこと、周貞（祖父）が子孫を守るために言えなかった悔しさが分かる様になってきました。これからも是非支えて頂きたいと願っています。紙面をお借りし、厚くお礼を申し上げます。

この『社記』がいつか若い人の手で現代語に直され、だれもが読め、歴史の大事さを知るために、参考にされる日を願っております。ご先祖様の本に参加できたこと、多くの方々の多大な協力のもとに出版されたことを重ね重ね深く感謝いたします。

戦国時代から十二代目 平松巖三女 小松邦子

嫡男 小松邦幸

孫 睦月

孫 幸太

平成三十一年三月